石川淳全集

第一巻

石川淳全集　第二卷

筑摩書房版

增補 石川淳全集第二卷
昭和四十九年二月二十日第一刷發行

著者 石川淳
發行者 井上達三
發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話 東京(291)七六五一(代表)
振替 東京四一二三

印刷 株式會社精興社
製本 牧製本印刷株式會社

(分類)0393(製品)73102(出版社)4604
74052

石川淳全集第二卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第二卷目錄

雪のはて……七
明月珠……二九
黄金傳説……五三
寒露……六五
窮菴賣卜……九九
無盡燈……一三一
燒跡のイエス……一七九
燃える棘……一九七
雅歌……二三一
かよひ小町……二五三

いすかのはし……二九一
雪のイヴ……三二七
しのぶ戀……三四五
處女懷胎……三七三
飛梅……四六五
變化雜載……四九七
晝霞……五二七
野ざらし……五四一
雙美人……五七三

雪のはて

『文學界』昭和十七年三月號

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

東京から汽車で六時間ばかりのところだが、急に山の中に來たやうなけしきである。しかし高い山ではない。丘の起伏の間を切りひらいて、だらだら上つたりおりたりする道がついてゐて、それがうねりながらいつか高みにのぼつて行き、しばらく來てふりかへると、さつき汽車をおりた小さい驛がつい足もとに見おろされるが、そこから先へ行くともう展望がきかず、あたりいちめん畑と森になつてゐるやうな地形である。

驛から出るバスが一里あまり走つて、道の二股に分れるところまで通ふ。バスはさらに分れた道の一つへ走りつづけるのだが、わたしはそこでおりて、畑の中をなほ十餘町あるかなくてはならない。やがて畑がとぎれて、丘に突きあたる。丘の麓は雜木林で、その周緣に農家が散在してゐて、一部落をなしてゐる。丘を越した向うはこのへんで溫泉と呼ばれる土地で、すなはちバスの終點である。そこは家數も多く、あきなひ店などもあるが、鑛泉を汲んで湧かす山の湯のことで、宿屋は二軒しかなく、それとても農作のはうが本業らしい。丘のこちら側では、鑛泉は出な

い。空氣がつめたく澄んでゐて、湯のにほひもしない。

畑に沿つた小川に土橋がかかつてゐて、わたるとすぐそこが庭である。茶の木の垣でざつとかこつてあるだけで、棒杭のほかに門がまへはない。はひつて正面はまつくろに煤けた農家の母屋である。右手にあたらしく建増した山小屋ふうの離れがある。それでも建ててから五六年にはなるだらう。離れの前に、梅の木が一本ある。その梅の木の下に、夫人は古い麥藁の海水帽をかぶつて籐椅子にかけてゐた。それがわたしのここに訪ねるひとである。

「まあ、そこにおかけ下さいまし。今いたづらをしてゐるさいちゆうです。」

ひくいテイブルの上に木炭紙をひろげて、夫人は習字用の細筆で水彩繪具をつかつてなにか描いてゐる。そして描くことに夢中になりながら、わたしが久しぶりで突然來たことをとうに知つてゐたかのやうなふぜいで、ちよつと聲をかけたきり、こちらをふりむかうともしない。海水帽のかげに横顔の鼻すぢが光つてゐる。その海水帽も籐椅子も、ともに赤黑く日燒がしてゐて、海は遙かに遠いのに、海岸の砂に吹きさらされてゐるやうな錯覺をおこさせる。もつとも、この土地にしてはけふはあたたかく、からりと晴れて、梅のつぼみがはじけさうに見えるほど日が直射してゐる。

わたしは置き捨てられたもう一つの籐椅子にかけて、すこし離れたところから、そつとテイブルの上をのぞいて見た。木炭紙には梅の花が描きかけてある。夫人はもとわたしの友だちのある畫家の弟子であつた。そして今その畫家の妻になつてゐる。筆は達者にすすめられて行く。梅はつい開かうとしてゐる。だが、よく見ると、これはただの梅の畫ではなかつた。花も枝も葉もす

べて平假名の細字をつらねて出來てゐる。そして、それらの文字はなにかの意味をなしてゐて、はつきりとは判讀できなかつたが、歌のやうに推された。

今時分アポリネールの眞似なんかしてゐるのですかと、まあそんな常談の一つもいひかけるところだらう。しかし、はたからの口出しを刎ねつけるほどのきびしさで、海水帽は思ひ深くかたむいてゐて、「いたづら」といつた當人のことばはうはのそらと聞えた。それにむかしの夷狄の風狂詩人がカリグラムのいたづらをしたことなど、夫人が知つてゐるはずはなかつた。おそらく字でなぞつてゐる畫も、初心らしい歌も、すべて思ひつめた心の流露なのだらう。わたしは何ともいひかけずに、籐椅子をはすに引いて、あふむいて空の青さを眺めてゐた。空には雲もなかつた。待つ間の長さを感じさせるやうなものはなにもなかつた。

夫人がちかごろ歌を作り出したといふことは聞いてゐたが、どんな歌を作つてゐるのか知らない。わたしにさういふ消息をつたへたのはある骨董屋である。これは通り名をみようじんと呼ばれてゐる人物である。神田明神の近くに住んでゐるせゐにちがひない。だが、その名はただ住所にちなんだといふのみではないらしかつた。この人物が古いなじみの某の土地の某の仲間では、むしろみような人といふ意をふくめてゐたかのごとくであつた。某の土地とはある花街である。某の仲間とは客とか藝者とかの一群である。わたしの友だちの畫家もかつて客としてその仲間の一人であつた。夫人もまたさうであつた。ただし夫人は客ではない。かつて藝者であつた。

右の土地とも仲間とも、わたしはなじみがあるやうな柄ではない。しかし、わたしはつとに、すくなくとも友だちの畫家よりもまへに、夫人を知つてゐた。いつどうして知合になつたかとい

ふいきさつはすべて書かでものことだが、それにしても、畫家を知る以前の夫人とわたしとのあひだにはかつて心情の交渉上危險な時期があつたといふことは伏せておきがたい。ただし、いそいで書きそへると、この危險は單に隱微の間にちらちらしただけで、實際には平穩清朗な附合に變化をあたへるやうな事件はなに一つおこるに至らなかつた。つまり、ある日わたしが大笑ひに笑はれたことに依つて、われわれのきもちにもたれぎみであつた危險の兆候が未然にけろりと解消したといふはなしである。

わたしが笑はれたといふはなしは清元の稽古に關してゐる。わたしは柄にもないことを考へるくせがあつて、そのころ蜀山人の生活を書き併せて蜀山文學を論じたいといふ念願に憑かれてゐた。わたしは長いあひだこの江戸第一等の作者のことが氣になつて、ほかのことが手につかずにゐた。しかし、わたしは學者でもなく研究家でもないのだから、ものごとを七くどく調査搜索することは苦手である。まあ、わたしはわたしなりに、蜀山の詩文を相手にするほかなく、當分は生活のはうを全然見ないかのごとく、もつぱら文學にのみ迫つて行かうと思つた。そして、まづばか正直に敵の術中に落ちてみるつもりで、この人物が不逞にも影のない紳士として一世をたぶらかした偏角的位置を、一介の狂詩人たる假裝を、せつせと追ひつめて行くことに依つて、蜀山精神の運動量を測定しようと思つた。そのとき、ふつと、ある考がわたしのうちに湧いて出て、たちまちその考のままに身を流して行くほかにうごきがとれなくなつた。それは蜀山の狂文學の技術を、操作を、わたしみづから體得しようといふことである。すなはち、わたしはみづから蜀山銅脈の風に倣つて、唐山の詩に一泡ふかせるやうな狂詩を作らなくてはならない。また萬葉古

今を踏まへつつ、俳諧の精神を顚倒させつつ、天明調の狂歌を詠まなくてはならない。これはたしかにきちがひ沙汰ではあらうが、ひとは多少とも自分をきちがひにすることなしには蜀山精神の眞諦に參ずることはできないだらう。いや、そんなことよりも、わたしは右の意圖をもちあつかひながら、ひとへにわが身の才能のみじかきを歎じ、われわれにあたへられた近代的教養と稱するものが無藝遲鈍の驢馬であつたことを痛感した。われわれはたつた百五十年ばかりまへの祖先があれほどすらすらと作り捨てた詩文のわざくれを讀みかつ解するのがせいぜいである。そして、笑止にも天明の複素的文學運動を天保以後の駄洒落と混同して、一口に江戸は墮落であかんと、目付のやうなことをいつて、大ゐばりで安心してゐる。この近代の墮落の末に當つて、遠く高士の清唱に和して韻をもてあそぶことのかたきは、とても手垢のついた原稿を雜誌に賣りつけることの比ではない。それでも、わたしの下根といへども、日夜努力してやまなければ、あるひは數年の後、どうやら見樣見眞似で、まあこんなものができましたと、狂詩狂歌の見本をならべるぐらゐには漕ぎつけられるかも知れない。これはわたしの漫然たる樂觀である。人間これくらゐの樂觀をもたなくては、なにも仕事はできない。

ところで、狂詩狂歌はさることながら、わたしはまた蜀山が好んだ河東節を習はうといふ念を發した。だが、無粹なわたしにとつて、これはヘブライ語を習ふよりも難事業である。そこで、ヘブライ語のまへにちよつとギリシャ語を嘗めてみるやうなきもちで、わたしは清元を習はうと思つた。ただし、北州一つだけでよい。といふのは、北州は蜀山の傑作の一つだからである。そして、蜀山はただその歌詞の作者たるにとどまらず、清元節草創のときに際して、その節附にも

無關係ではなかつたと推されるかどがあるからである。

北州を習ふには、師匠に就かなくてはならない。だが、ちらちらした女どもに伍して稽古所の格子をくぐることは、どうも氣はづかしくてできない。そのとき都合よくわたしのために三味線を取つてくれたのが、夫人……畫家を知る以前の夫人であつた。わたしは異常な決心で、笑ふやつは鬼に食はれろといふいきごみで、はにかんではいけないぞと自分にいひきかして、きちんと坐つて、さて稽古をはじめてみると、とたんにはにかんで、調子をはづしてしまつた。ことに、〽銀河ときけばしろじろと白かたびらの袖にそよそよ、といふところが、どうもいけなかつた。ほかも全部いけなかつたのではあらうが、主觀的にはとくにそこがいけなかつた。

夫人はちよつと三味線の手を休めて、わたしの調子の立ち直るのを待つた。そして、わたしが依然としてまごついてゐるのに對して、そつけないほどすました顏をしてゐた。職業的な修練がさういふ表情を仕立てたのだらう。ほかの相手ならば、わたしはさうまではにかんだり、まごついたりはしなかつたかも知れない。すくなくとも、調子をはづしたのをいいしほに、自分からさつさと笑ひ出すことができたかも知れない。しかし、わたしはかねて心情の危機を感じてゐただけ一そうはにかみ、相手がすましてゐただけ一そうまごついて、ずゐぶんはづかしいことを書くが、もうかうなつてはついこのひとの手をにぎつてしまふほかにうごきのとれやうがないと、また格別に異常な決心をするところにまで押しつめられてしまつた。

そのときとなりの部屋から、ふはふはふはと、はじめは何の音とも判らなかつたが、煙のやうにひろがつて來た物のひびきのやがてわつと破裂して、それが人間の笑ひ聲だと判つたときには、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com